

広報 Koho Gallery
展示室

第46回

「寿」と書かれた杯のまわりでもぞもぞと蠢く亀たち。よく見ると顔は人間です。ちょっと不気味な感じもしますが、これらはみんな当時の歌舞伎役者の似顔絵になっています。

これを描いた歌川国芳は、広重と同世代の絵師で武者絵を得意としましたが、そのほかにも風景画や美人画をはじめ、あらゆる分野に健筆をふるいました。

「亀喜妙々」が作成された嘉永元年(1848)ごろは、老中水野忠邦が行った天保の改革により、役者絵、遊女などを描くことが禁じられていました。しかし、役者を見たいという歌舞伎ファンたちの要望は絶えるはずありません。そこで国芳は、持ち前のユーモアを武器に、「戯画」として役者の姿を描いていきます。

23匹の亀のうち、大きく描かれているのは大物役者です。右端下の一番大きな亀は歌舞伎界の重鎮四代目中村歌右衛門。亀の甲羅には家紋の裏梅が見えます。江戸で活躍した役者ですが、嘉永5年(1852)に大阪で客死します。追善のための死絵が82種類作成されましたが、あまりに多かったので絵や版木が没収されたといえます。

杯にたどり着き、ただ一匹酒にありついているのは市川箱右衛門です。背中の中羅に「トラ」と書かれているように、大酒飲みだったようです。箱右衛門の似顔絵に「酒が飲みてへ」と添え書きされている浮世絵も残っています。

国芳やその弟子たちによる動物の戯画は、一見愉快で面白い絵だったり、かわいい絵だったりし

— 企画展 —

浮世絵に描かれた動物たち展

— 珍獣・猛獣・いやしのペット —



「亀喜妙々」 歌川国芳(個人蔵)

ますが、政治的な背景を知ると見方もちょっと変わってくるでしょう。過去には歌麿のように禁を侵して絵を描き、手鎖の刑に処せられた絵師もいる浮世絵界。この「亀喜妙々」には取締りの網をくぐり抜け、ぎりぎりのところで立ち向かう国芳の反骨精神が現れているといえるでしょう。

「浮世絵に描かれた動物たち展 — 珍獣・猛獣・いやしのペット —」では、大きな屏風に描かれたライオンや、猫やたぬきの楽しい「おもちゃ絵」などいろいろな絵を展示し、江戸・明治時代の人々と動物たちの関わりを様々な面から眺めていきます。大人から子供まで楽しめる展覧会ですので、ぜひご家族そろってご覧ください。

馬頭広重美術館 学芸員 長井裕子

【会 期】 8月6日(木)～9月13日(日)

【ミュージアムトーク(展示解説)】

8月8日(土) 午後1時30分～
当館学芸員

【休 館 日】 8月10日、17日、24日、31日、
9月7日

【問い合わせ】 那珂川町馬頭広重美術館

☎0287-92-1199

ミニギャラリー
作品募集!

あなたの作品をここに展示してみませんか?

絵画、写真、絵手紙などの作品をお待ちしております。

申し込み・問合せ: 企画財政課

☎0287-92-1114

優秀賞 「ファミリーで祈願」
山中富夫さん(宇都宮市)



ミニ
ギャラリー

ばとう道の駅
写真コンテスト
受賞作品



入選 「春のしらべ」
平野ひな子さん(大田原市)